

◆リメイク・プロジェクト

明朝の第3会議室。そこには、初対面の3人がいた。香織の左に座った青年は、背が高く、短髪を失らせている。七分丈のシャツにジーンズ、サンダルと、ラフな格好をしている。身長は180cmくらいだろう。

彼は緊張しているのか、机の上の段ボール箱を見つめている。箱の隙間から尻尾だけ飛び出た『ダイノス』に意識を集中しているようだ。

香織の右に座った女性は、身長は150cmくらいだろうか、小柄で幼い顔立ちだ。

胸元まで届くくらいの茶髪を左右ふたつに結わえた、いわゆる「ツインテール」がよく似合っている。スカートスーツ姿もどこか初々しくて、女の香織から見てもかわいらしい。他の事業部から部長が引き抜いてきたのだろうか。

会議室のドアが開き、ページのスーツを着た八幡部長が颯爽と現れた。

「おはよう諸君！ これで全員だな」

本職はモデルなんじゃないかと思うほど、今日もキマっていた。

（グラマーで、ウエストが細くて、脚もキレイで……うらやましいなあ）

「篠崎君。まずはプロジェクトの概要からはじめよう。こちらに資料を用意してある」
「は、はい！」

香織は仕事モードに頭を切り替えた。

（あれ？ 全員って、プロジェクトメンバーは3人だけ？）

左の青年が身体を長机に乗り出す。

「八幡部長、ひよっとしてその机にあるのって……」

「さすが大島君、君の得意分野かな？」

部長は大島と呼ばれた青年を見つめている。

「『ダイノス』っスよね！ しかも『クリムゾン・レックス』限定版……全天候型！」

「さーて、どうかな」

部長はクイズ番組の司会者のような口ぶりで、段ボール箱の中からゆっくりと紅い恐竜を取り出した。

「正解っスね！」

大島の言葉に香織は少し驚いた。

（尻尾を見ただけでわかるんだ。リアルタイムに『ダイノス』で遊んでた世代なのかな）

「さすが大島君。旧『ダイノス』も……いや、まずはこの資料を読んでもらおうか」

部長から白黒片面2ページの資料が配られた。

「こ、これって……マジっスか!?!」

動揺している大島を制するように、部長はプロジェクトの概要を淡々と述べた。

〈ダイノス・リメイク・プロジェクト〉

- 販売は10月末。年末商戦の最重要製品
- 製品コンセプト、ターゲット顧客は未定
- ダイノスブランドを使う以外、何をしてもいい

◆伝説は始まる

「体制だが、私がプロジェクトマネージャーとして全責任を持つ。浜課長を間に挟んで、篠崎君にチームリーダーを務めてもらう」

（それって、私のところに質問と作業と責任が集中するってことなんじゃあ……）

香織はそもそも『ダイノス』をリメイクする、ということしか聞いていない。自分の置かれた状況と、このプロジェクトの未来に不安を感じずにはいられない。

「篠崎君。まずは自己紹介をして、その後プロジェクト、いや我が社の環境分析をしていこうか。環境分析に有効なフレームワークは、何だかわかるかな？」

部長の言葉で香織は現実引き戻された。両側のふたりが、香織に視線を浴びせる。（環境分析に使えるフレームワーク……：そういえば昨日、神保さんが紹介していたあれならどうだろう）

「『SWOT分析』ではないでしょうか。それ以外はちょっと思いつきません」

「そうか。それでは、フレームワークについての資料を渡そう」

部長は『研究ノート』と書かれた薄いバインダーを香織に手渡し、口元を緩めた。昨日のセミナー受講者が持っていたバインダーだ。

（もしかして、昨日はわざと渡さなかったってこと？）

部長は香織の気持ちを読み取るかのように、笑みを浮かべている。

「攻略本を先に読んだら、ゲームは面白くならないだろう？」

その言葉が香織に向けられたものと理解するのに、わずかな時間を要した。

「まずは君たちで環境分析をやった上で、ターゲット顧客についての意見を出してくれたまえ。私からは以上だ」

セミナーの資料だった『研究ノート』と、ポカンとする3人を残し、八幡部長は足取りも軽やかに会議室から去っていった。